

複雑系としての政治と規範的相互作用

—有限資源としての価値と善としての価値から—

17B16309 山本洵哉

要旨

本稿では規範的議論のあり方について考察する。マスメディア、SNS を問わず社会の様々な場で繰り広げられる規範的議論は、ときに激しい対立を生み議論の進行すら不可能になることもある。このような規範的議論がもつ意義とは何か。『価値』の観点から規範的議論の構造を解き明かし、政治における役割を複雑系の観点から明らかにしことで考察する。

キーワード

規範、価値観、価値、規範的議論、帰納と演繹、階層構造、相互作用

目次

1. イントロダクション
2. 規範とは何か
 - 2.1 価値とは何か
 - 2.2 規範と価値観の階層構造
 - 2.3 まとめ
3. 複雑系としての政治
 - 3.1 複雑系としての政治
 - 3.3 複雑系政治と位相角
4. 結論

1. イントロダクション

政治の話をしよう、と言ったときにその内容は2つの系統に分けられる。1つは因果関係に関する議論でもう1つは規範的議論である(久米, 2013:2)。因果関係に関する議論とはその名の通り、ある政治現象を生み出した原因についての議論である。規範的議論とは規範すなわち「～すべき」と記述される命題が主張に含まれるような議論である。因果関係に関する議論が市井で行われることは稀である一方で、規範的議論は至るところで行われている。

「沖縄の在日米軍は撤退すべきである」「憲法9条は改正すべきである」といった議論は新聞やテレビといったマスメディア、SNSなどの媒体を問わず社会のあらゆる場所で行われている。場合によっては相反する意見同士が激しくぶつかりあい、何も建設的な議論を生まないうまま対立だけが深化していくこともある。

規範的議論が行われるのは政治の領域だけだろうか。「政治」というと大仰な話題を想像しがちだが規範的議論は日常的な話題においても行われている。我々が教養卒論などというものを書かされているのも、「東工大生は教養を身に着けるべき」というILAからの規範の押し付けによるものである。教養教育の充実をはじめとして教育改革については否定的意見もあるが、「教育改革前のカリキュラムに戻すべきである」といった主張もまた規範的議論である。

本稿の目的はそんなありふれた存在である規範的議論と政治と関りを明らかにすることである。規範的議論の中には一見して二項対立の関係に見えるのにも関わらず対立が生じることがなく問題が解決するものがある。一方で議論が全く進行しないまま対立だけが深化していくこともある。『規範』『価値観』『価値』と要素に還元して規範的議論の構造を明らかにすることでこの違いを生む原因を明らかにする。構造を理解することで規範的議論が社会の中でどのような役割を果たしているのかも明らかになる。規範的議論の持つ効能がより効果的に発揮されるための方法も提案する。

2 規範とは何か

規範的議論の性質を明らかにする前にまず規範の定義と性質を確認する。規範とは「～すべき」と記述される命題である。規範とは判断基準となるものであり、ある程度の大きさの集団、社会で広く受け入れられているものを指すことが多い。規範は個人が持つ判断基準である価値観と深い関りがある。価値観は個人が持つ、何に価値を見出すのかということについての判断基準である。規範についてより小さな要素に還元して説明しようとする最終的には「価値とは何か」という問いにたどり着くのである。本章では「価値とは何か」という問いから出発して規範の持つ性質を明らかにする。

2-1 価値とは何か

価値を定義しようとするとき、何の学問を背景とするかによって様々な定義の仕方が存在する。経済学においては取引額を決定するための指標としての価値を研究するし、政治学においては有限資産を価値として定義している。

本稿においての価値の定義は倫理学や哲学の領域で用いられる「善いという性質」である。この価値の性質については様々な議論が存在するが本稿では公理との比較で価値の性質を明らかにしたい。規範的議論の最小構成要素としての価値を考えるにあたり、別の議論の様式である因果関係に関する議論の最小構成要素である公理との比較は有効であると考えられるからである。

因果関係に関する説明の枠組みの中で最も良く知られているのは帰納と演繹である。帰納は多くの事実からそこに潜む一般法則を見つけ出す方法で、演繹は前提となる条件を設定してそこからどんな法則が得られるかを探求する方法である。説明の抽象度に注目し、具体から抽象に向かうような説明を帰納、抽象から具体に向かうような説明を演繹と位置付けることもできる。

具体的な事例を用いて帰納的な説明と演繹的な説明を理解してみよう。例えば、高いところにあった物体が地面に落下するまでにかかる時間について興味があるとする。帰納的な説明ではまず実際に物体を高い位置から落としてその様子を測定する。そしてそのデータ

を解析して落下にかかる時間がどのような因子に依存しているのかを明らかにする。一方で演繹的な説明では「物体にかかる重力は $F=mg$ で表される」という法則から出発して落下にかかる時間を求める。

どれだけ多くの事象に基づいた帰納的な分析を行っても、それによって得られた法則に当てはまらないような事象が存在する可能性を完全に否定することはできない。先ほどの例でいえば、「確かに実験によって落下に関係する因子が明らかになったかもしれないが、その因子は実験で使った物体にのみ作用するのではないか」といった批判がありうるのである。もちろんそのような批判を避けるためにより説明力のある実験を行うのだけれども、りんごと梨で落下に関する法則が全く異なる可能性を完全に否定することはできないだろう。

一方で演繹的説明では先に説明の対象となる領域を前提条件として指定するために、得られた説明は絶対的なものである。そのため、一般的に帰納よりも演繹の方が説明の説得力は強いとされている。先ほどの例でいえば、「物体にかかる重力は $F=mg$ 表される」という前提が正しければ、その後の微分方程式の解き方に間違いがない限り得られた結果には間違いがないと考えられる。しかし演繹的な説明に問題がないというわけではない。最も大きな問題は前提条件をいかにして決定するのかという問題である。物体の落下についての前提条件は高校物理を知っている人間なら大抵の人間が同意するだろうが、他の事例に対してはどうだろうか。より先進的でより複雑な研究においては、専門家ですら前提条件に関する同意が得られないかもしれない。演繹は前提条件から得られる説明の妥当性を保証してくれるが、前提条件そのものの妥当性は何も述べないのである。

演繹の際のもっとも基本的な前提条件が公理である。原理的にはどのような公理を採用することも許されるが、実際には科学者コミュニティの中である程度合意された幅が存在する。例えば物理の領域では「 $1+1=2$ 」という公理が一般的に採用されるかもしれないが、数学のある分野においては「 $1+1=0$ 」という公理を採用する。

価値と公理はそれぞれ議論の際の前提条件となるという点で類似性がある。規範的議論の前提条件は価値であり、演繹的議論の前提条件は公理である。何を価値とみなすのか、何を公理とみなすのかは個々人の判断に委ねられるし、その妥当性は「他のみんなが使っているから」程度のものである。

2-2 規範と価値観の階層構造

価値観とは個々人が何に価値があると考えているのかの判断基準である。本章冒頭で価値観は規範の構成要素であると述べた。規範は社会の持つ判断基準とすることができる一方で、価値観は個々人の持つ判断基準である。社会の構成要素が個人であるならば、規範の構成要素もまた価値観であると類推できる。しかし個人の振る舞いの総和が社会の振る舞いとはならないのと同様に、価値観の総和は規範とはならない。

部分の総和が全体とならない系は複雑系として知られており、規範と価値観の関係も複雑系とみなせる。複雑系を理解するうえで重要な概念は系の階層構造である。ある要素が複数集まることでユニットを構成する、というような構造を階層構造と呼ぶ。ある立体の体積に関心があるとしよう。積分を利用して体積を測定しようとするとき、その立体を限りなく薄い板に切り分けて、それぞれの板の体積を測定して足し合わせるという手順を踏む。このとき、『限りなく薄い板』は下位の階層に属し、『立体』は上位の階層に属している。立体の体積の場合は上位階層の特性が下位階層の特性の総和で表現でき、複雑系ではない。ある系が複雑系になるときはその系の階層構造は「階層内の各要素が複雑に相互作用している」、「階層間に相互作用がある」という特徴を持つ。

立体の体積について考えたときに倣って社会の規範がどのような階層構造を持つかを整理してみる。『立体と限りなく薄い板』に相当するのは『社会と個人』である。立体—板系において体積という特性を評価したのと同様に社会—個人系において判断基準という特性を評価しようとする。下位階層である個人の判断基準（＝価値観）の総和が上位階層である

社会の判断基準（＝規範）と一致していない。この原因は上で挙げた2つの複雑系の要件の両方を社会一個人系が満たしていることである。他人の価値観を知ることによって自分の価値観に変化がもたらされた経験は誰にでもあるだろう。規範が自分の価値観を変容させるだけでなく、場合によっては個人によって規範が変容させられることもありうる。

2-3 まとめ

これまでの議論を総括して、規範的議論とは価値を前提条件として、「～すべき」という命題を含む議論と定義できる。規範的議論と演繹的議論との間にある最も大きな違いは、演繹的議論が理論を対象としているのに対して規範的議論は人間を対象としている点である。規範的議論が対象とする人間はその議論が前提としている価値を認めていない人間にも及ぶため、異なる価値同士の対立を生じることになってしまう。

3 複雑系としての政治

第2章では規範的議論の構造について議論した。第3章では規範的議論が政治に対して持つ効能と、その効能を最大化するための手段について議論する。

3.1 複雑系としての政治

2-1 冒頭で政治学における価値の定義は有限資産であると述べた。これはデイビット・イーストンによる政治の定義である、「社会に対する価値の権威的配分 (the authoritative allocation of values for a society)」に基づいている。資産は無限に存在すれば、誰もが欲しいだけ手に入れられるためにその配分率は自由に決定できる。しかし有限であった場合には闘争を防ぐために何らかの規則に従ってその配分率が決定される。その配分の規則は経済的・社会的・権力的・権威的に決定されるかもしれない。有限資産が権威的に配分されたとき、そこに政治の力学が働いたとみなしてそのメカニズムを解明するのが政治学という学問である。

権威的な配分が成されるには、社会の構成員がその命令に服従する必要がある。すなわちその社会の規範において、その権威には服従すべきとされていなければならない。政治とは

善性としての価値に基づいて有限資産としての価値を配分する行為だと考えられる。権威が規範に基づいているならば、社会の構成要因である個人はその決定にあらがえないと考えることもできるかもしれない。もしそれが正しいならば実際に行われる政治に対して批判が起きることはないとも考えられるが、現実では政治に対しての批判が絶えないのはなぜだろうか。それは 2-2 で述べたように規範と価値観の間には誤差が生じてしまうからである。価値観の総和が規範とはならない以上、規範に基づく権威による決定を受け入れられない個人も存在するためと考えられる。また、社会に存在する規範が必ずしも 1 つは限らない。ある国に 2 つの宗教が存在したとして、その国は 2 つの宗教的規範が存在すると考えられるが、その場合でも政治による決定は 2 つの集団に平等に働くであろう。1 つの社会に複数の規範が存在し、その規範の構成要因たる価値観はさらに無数に存在するならば一体どのようにして政治が行われているのだろうか。

規範的議論はバラバラな個人が持つバラバラな価値観を規範という社会で広く受け入れられる形に収れんさせる効果を持つと考えられる。規範と価値観の関係について述べた際、規範と価値観の階層構造が複雑系的な振る舞いをすると述べた。そして複雑系的な振る舞いのためには階層内・階層間で相互作用している必要があると述べた。規範的議論は階層内・階層間相互作用を引き起こしていると考えられる。個人間の規範的議論は階層内相互作用を引き起こし、個人がメディアを利用して社会に対して規範的議論を発信することは階層間相互作用を引き起こすと考えられる。規範的議論が複雑系的振る舞いを手助けすることは規範の形成のために必要であると考えられる。

規範的議論の助けを受けて社会に広く受け入れられるような規範が形成されると述べたが、多くの場合無数に存在していた山が均されて数えるほどの数にまで減少する程度で、ただ 1 つの絶対的な規範が形成されることは稀である。ある程度の数にまで絞り込むことはできても、価値がどうしても相容れない主張が表れてしまうためである。社会に複数の規範が共存している様子はこのように描像される。またこのとき、主張同士の衝突を抑止し歩み

寄せさせるような効果を持っていたはずの規範的議論は互いを攻撃するようになってしまう。

ここで規範的議論の強度はいかなる要素で決定されるのかを考える。規範的議論は異なる価値観同士を収れんさせ規範という形にまとめ上げる、さながら引力とも呼ぶべき性質を持つ一方で、相容れない規範同士では、まるで斥力がはたらくかのように攻撃しあう。引力を正、斥力を負として異なる価値や規範同士にはたらく相互作用を規範的議論の強度として定義する。

もし強度を支配する因子が特定でき、定量的に評価可能ならば、物理で多体問題を解くかのようにしてことなる規範がどのように時間発展するかを予測することも可能である。そのために力学における物体の質量や座標といった概念を上手く変換する必要がある。質量はその規範を採用している人数、座標には政治スペクトルを利用することが考えられる。代表的な政治スペクトルは左派中道右派の区分である。この場合は中道を原点、右派を正、左派を負としてより過激な主張になるほど座標の絶対値を大きくするといった方法で座標を決められる。

以上の強度の議論にはいくつかの問題点がある。第一に強度の評価が困難ということである。定量的評価の困難さは言うまでもないが、定性的にも正負の決定の段階で困難がある。例えば右派同士では主張の相違が少なく互いに譲歩することによって引力がはたらくが、左派と右派の間では譲歩できずに斥力がはたらくかもしれない。先ほどの座標の議論と合わせると、近ければ引力、遠ければ斥力がはたらくと考えられる。その閾値はどこにあるのだろうか。右派と中道、左派と中道の間では0になると考えるのが自然かもしれないが、その場合中道は他の主張と相互作用しないことになってしまう。中道とは必ずしも他の主張と相互作用しない虚無のような主張ではないだろう。このような強度の描像には限界があると考えられる。

第二に階層構造を踏まえられていない点である。上位階層にある規範間に階層内相互作用として規範的議論がはたらくとしているが、実際には規範的議論は階層間相互作用とし

てはたらき、下位階層にある個人の価値観が変化することで上位階層の規範に影響を及ぼす。このプロセスを無視することで規範の時間発展における重要な性質を見落とす可能性がある。

3.2 複雑系政治と位相角

闘争を防ぐべく働いていた規範的議論がある閾値を越えて闘争を生み出すようになってしまったとき、互いに歩み寄ることはなくともせめて冷静に議論するためにはどのような手法が考えられるだろうか。ここで導入するのが『安全保障の位相角』における位相角の概念である。

政治学において複数の主張をある1直線の評価軸に並べてそれぞれの主張を比較する、政治スペクトルという分析手法がある。例えば右翼/左翼、現実主義/理想主義などが一般的に用いられる。しかしこのような分析手法が実際の政治議論にフィードバックされた結果として、「左右に分極して交わらないまま、思考停止の行き詰まりが続いている」（川名他 2018: 序文 iii）と指摘されている。この行き詰まりは閾値を超えて闘争を続ける規範的議論のようである。そして次章にて左右の分極を解消するための手段として、位相角を導入する。左翼/右翼の直線を真ん中から折りたたむようなイメージで、政治スペクトルを一次元空間から二次元空間に拡張し、ある主張が真ん中からどれだけずれているかを評価するための手段として位相角を導入するのである。（川名他 2018: 第1章 5）

規範的議論においても同様の作業が可能である。規範的議論を行っている2つの規範があった時に、それぞれの規範が何の価値に基づいているのかを同定し、得られた2つの価値をそれぞれ縦軸、横軸に据えて2つの規範をプロットしてみればよい。異なる規範に基づく主張同士がそれぞれの主張を適切に相対化するための手段として、位相角を「測る」ことは有用だと考えられる。2つの主張のどこに相違性があるのか、逆に同じである部分はどこなのか、そして2つの規範に基づく価値を同時に満たすような政策はどのようなものなのか、こういったことが政治スペクトルの二次元化によって得られるのである。

二次元化によって得られる中道に関するより詳しい描像は、3.2 で述べた規範の多体問題における問題点についての議論を補強する。規範的議論の強度を政治スペクトルから変換した座標によって評価するとき、中道があたかも虚無主義者のように描かれてしまうという問題があったが、二次元化によって得られる中道の特性にはそぐわない。

位相角のさらなる発展として、スペクトルの n 次元化といった手法も考えられる。位相角は比較手段として有用であるが、重要なのはむしろ一次元での分析を二次元に拡張することである。1つの規範が必ずしも1つの価値に基づいているわけではないので、 n 種類の価値に基づく n 次元空間を考えることで、より詳細な分析が可能になると考えられる。

4 結論

規範を善性としての価値を基に定義して、規範的議論を規範と価値観の間の相互作用として分析した。政治が善性としての価値と有限資産としての価値をめぐる議論であることを明らかにし、政治における規範的議論の役割を明らかにした。規範的議論の役割をさらに効果的に発揮するために位相角の概念が重要であることも明らかにした。

規範の多体問題においては n 次元化された政治スペクトルにもとづいて各規範を n 次元空間内に配置し、規範的議論が相互作用としてはたらくこととみなすことで各規範の時間発展を予測できる可能性が示唆された。そのためには多体問題という計算上の複雑さの他に価値観と規範の複雑系的関係をも解決する必要がある、さらなる研究が必要とされる。

参考文献

- 川名晋史・佐藤史郎・古賀慶・中村長史・佐藤量介・齊藤孝祐・松村博行・山口航・上野友也(2018)『安全保障の位相角』 法律文化社
- 久米 郁男(2013)『原因を推論する 政治分析方法論のすゝめ』 有斐閣